

桃太郎

芥川龍之介



むかし、むかし、大むかし、ある深い山の奥に大きい桃の木が一本あった。大きいとだけではない足りないかも知れない。この桃の枝は雲の上にひろがり、この桃の根は大地の底の黄泉の国にさえ及んでいた。何でも天地開闢の頃おい、伊弉諾の尊は黄最津平阪に八つの雷を却けるため、桃の実を礫に打つたといふ、——その神代の桃の実はこの木の枝になつていたのである。

この木は世界の夜明以来、一万年に一度花を開き、一万年に一度実をつけていた。花は真紅の衣蓋に黄金の流蘇を垂らしたようである。実は——実もまた大きいのはいうを待たない。が、それよりも不思議なのはその実は核のあるところに美しい赤児を一人ずつ、おのずから孕んでいたことである。

むかし、むかし、大むかし、この木は山谷やまたにを掩おおった枝に、累々るるいと実を綴つづったまま、静かに日の光りに浴していた。一万年に一度結んだ実は一千年の間は地へ落ちない。しかしある寂しい朝、運命は一羽の八咫鴉やたがらすになり、さつとその枝へおろして来た。と
思うともう赤みのさした、小さい実を一つ啄ついばみ落した。実は雲霧くもぎりの立ち昇のぼる中に遙はるか下の谷川へ落ちた。谷川は勿論もちろん峯々の間に
白い水煙みずけぶりをなびかせながら、人間のいる国へ流れていたのである。

この赤児あかごを孕はらんだ実は深い山の奥を離れた後のち、どういふ人の手に拾われたか？——それはいまさら話すまでもあるまい。谷川の末にはお婆ばあさんが一人、日本中にほんじゅうの子供の知っている通り、柴刈しばかりに行ったお爺じいさんの着物か何かを洗っていたのである。……

桃ももから生なれた桃太郎ももたろうは鬼おにが島しまの征伐せいばつを思おもい立たつた。思おもい立たつた訣わけはなぜかというと、彼かれはお爺おやさんやお婆おばさんのように、山やまだの川かわだの畑はたけだのへ仕事しごとに出いるののがいやだたつたせいである。その話わを聞きいた老人らうじん夫婦ふうふは内心うちんこの腕白わんぱくもののに愛想あいそをつかしていた時ときだたつたから、一刻いこくも早はやく追おい出いしたきに旗はたとか太刀たちとか陣羽織じんばおりとか、出陣しゅんの支度したくに入用にゆうようのものは云いうなり次第しだいに持もたせることことにした。のみならず途中ちゆうちゆうの兵糧ひやうりやうには、これも桃太郎ももたろうの註文ちゆうもん通り、黍団子きびだんごさえこしらえてややつたのである。

桃太郎ももたろうは意気揚々いぎようようと鬼おにが島しま征伐せいばつの途とに上のぼつた。すると大おほきい野良犬のらいぬが一匹いっぴき、饑うえた眼まなこを光あらせながら、ここう桃太郎ももたろうへ声こゑをかかけた。

「桃太郎さん。桃太郎さん。お腰に下げたのは何でございませう？」

「これは日本一の黍団子だ。」

桃太郎は得意そうに返事をした。勿論実際は日本一かどうか、そんなことは彼にも怪しかつたのである。けれども犬は黍団子と聞くと、たちまち彼の側へ歩み寄つた。

「一つ下さい。お伴しましょう。」

桃太郎は咄嗟に算盤を取つた。

「一つはやられぬ。半分やろう。」

犬はしばらく強情に、「一つ下さい」を繰り返した。しかし桃太郎は何といつても「半分やろう」を撤回しない。こうなればあらゆる商売のように、所詮持たぬものは持つたものの意志に服従するばかりである。犬もとうとう嘆息しながら、黍団子を

半分貰う代りに、桃太郎の伴ともをすることになった。

桃太郎はその後犬のちのほかにも、やはり黍団子の半分を餌食えじきに、猿さるや雉きじを家来けらいにした。しかし彼等は残念ながら、あまり仲なかの好い間がらではない。丈夫な牙きばを持った犬は意気地いけじのない猿を莫迦ぼかにする。黍団子の勘定かんじように素早い猿すばやはもつともらしい雉を莫迦にする。地震学などにも通じた雉は頭の鈍にぶい犬を莫迦にする。——こういういがみ合いを続けていたから、桃太郎は彼等を家来にした後も、一通り骨の折れることではなかった。

その上猿は腹が張ると、たちまち不服を唱となえ出した。どうも黍団子の半分くらいでは、鬼が島征伐の伴をするのも考え物だといひ出したのである。すると犬は吠ほえたけりながら、いきなり猿を噛かみ殺そうとした。もし雉がとめなかつたとすれば、猿は蟹かにの仇打あだうちを待たず、この時もう死んでいたかも知れない。

しかし雉は犬をなだめながら猿に主従の道徳を教え、桃太郎の命に従えと云った。それでも猿は路ばたの木の上に犬の襲撃を避けた後だったから、容易に雉の言葉を聞き入れなかった。その猿をとうとう得心とくしんさせたのは確かに桃太郎の手腕である。桃太郎は猿を見上げたまま、日の丸の扇おうぎを使い使いわざと冷かにいい放した。

「よしよし、では伴をするな。その代り鬼が島を征伐しても宝物たからものは一つも分けてやらないぞ。」

欲の深い猿は円まるい眼めをした。

「宝物？　へええ、鬼が島には宝物があるのでですか？」

「あるどころではない。何でも好きなものの振り出せる打出うちでの小槌こづちという宝物さえある。」

「ではその打出の小槌から、幾つもまた打出の小槌を振り出せ

ば、一度に何でも手にはいる訣わけですね。それは耳よりな話です。どうかわたしもつれて行つて下さい。」

桃太郎はもう一度彼等を伴に、鬼が島征伐の途みちを急いだ。

三

鬼が島は絶海の孤島だった。が、世間の思っているように岩山ばかりだった訣わけではない。実は椰子やしの聳そびえたり、極楽鳥ごくらくちようの囀さえずつたりする、美しい天然てんねんの楽土らくどだった。こういう楽土に生せいを享うけた鬼は勿論平和を愛していた。いや、鬼というものは元来我々人間よりも享樂きょうらく的に出来上つた種族らしい。瘤取こぶりの話に出て来る鬼は一晩中踊りを踊っている。一寸法師いっすんぼうしの話に出てくる鬼も一身の危険を顧みず、物詣ものもようでの姫君に見とれていたらしい。

なるほど大江山の酒顛童子や羅生門の茨木童子は稀代の悪人のように思われている。しかし茨木童子などは我々の銀座を愛するよう^{すざくおおじ}に朱雀大路を愛する余り、時々そつと羅生門へ姿を露わしたのではないであろうか？ 酒顛童子も大江山の岩屋に酒ばかり飲んでいたのは確かである。その女人を奪つて行つたというのは——真偽はしばらく問わないにしろ、女人自身のいう所に過ぎない。女人自身のいう所をことごとく真実と認めるのは、——わたしはこの二十年来、こういう疑問を抱いている。あの頼光や四天王はいずれも多少気違いじみた女性崇拜家ではなかつたであろうか？

鬼は熱帯的風景の中に琴を弾いたり踊りを踊つたり、古代の詩人の詩を歌つたり、頗る安穩に暮らしていた。そのまた鬼の妻や娘も機を織つたり、酒を醸したり、蘭の花束を拵えたり、

我々人間の妻や娘と少しも変らずに暮らしていた。殊にもう髪
の白い、牙きばの脱ぬけた鬼の母はいつも孫の守もりをしながら、我々
人間の恐ろしさを話して聞かせなどしていたものである。――

「お前たちも悪戯いたづらをすると、人間の島へやってしまうよ。人間
の島へやられた鬼はあの昔の酒顛童子のように、きつと殺され
てしまうのだからね。え、人間というものかい？ 人間という
ものは角つのの生はえない、生白なましろい顔や手足をした、何ともいわれず
気味の悪いものだよ。おまけにまた人間の女と来た日には、そ
の生白い顔や手足へ一面なまりに鉛なまりの粉こをなすつているのだよ。それ
だけならばまだ好いいのだがね。男でも女でも同じように、謙うそは
いうし、欲は深いし、焼餅やきもちは焼くし、己惚うぬぼれは強いし、仲間同志
殺し合うし、火はつけるし、泥棒どろぼうはするし、手のつけようのな
い毛だものなのだよ……」

四

桃太郎はこういう罪のない鬼に建国以来の恐ろしさを与えた。

鬼は金棒かなぼうを忘れたなり、「人間が来たぞ」と叫びながら、亭々ていていと聳そびえた椰子やしの間を右往左往うおうざおうに逃げ惑まどった。

「進め！ 進め！ 鬼という鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまえ！」

桃太郎は桃の旗はたを片手に、日の丸の扇を打ち振り打ち振り、犬猿雉いぬざるきじの三匹に号令した。犬猿雉の三匹は仲の好いい家来けらいではなかつたかも知れない。が、饑うえた動物ほど、忠勇無双むそうの兵卒の資格を具えているものはないはずである。彼等は皆あらしのようひとかに、逃げまわる鬼を追いまわした。犬はただ一囓ひとかみに鬼の若者

を噛み殺した。雉も鋭い嘴くちばしに鬼の子供を突き殺した。猿も——猿は我々人間と親類同志の間がらだけに、鬼の娘を絞殺しめころす前に、必ず凌辱りようじよくほしいままを恣まにした。……

あらゆる罪悪の行われた後のち、とうとう鬼の酋長しゅうちょうは、命をとりとめた数人の鬼と、桃太郎の前に降参こうさんした。桃太郎の得意は思うべしである。鬼が島はもう昨日きのうのように、極楽鳥の囀さえずる楽土ではない。椰子やしの林は至るところに鬼の死骸しがいを撒まき散らしている。桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の家来けらいを従えたまま、平蜘蛛ひらぐものようになつた鬼の酋長れんびんへ厳おごそかにこういい渡した。

「では格別の憐愍れんびんにより、貴様きさまたちの命は赦ゆるしてやる。その代りに鬼が島の宝物たからものは一つも残けんじようらず献上するのだぞ。」

「はい、献上致します。」

「なおそのほかに貴様の子供を人質ひとじちのためにさし出すのだぞ。」

「それも承知致しました。」

鬼の酋長はもう一度額ひたいを土へすりつけた後、恐る恐る桃太郎へ質問した。

「わたくしどもはあなた様に何か無礼ぶれいでも致したため、御征伐ごせいばつを受けたことと存じて居ります。しかし実はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた様にどういう無礼を致したのやら、とんと合点がてんが参りませぬ。ついてはその無礼の次第をお明あかし下さる訣わけには参りますまいか？」

桃太郎は悠然ゆうぜんと頷うなずいた。

「日本にっぽん一いちの桃太郎は犬猿雉いんいちの三匹の忠義者を召し抱かかえた故、鬼が島へ征伐に来たのだ。」

「ではそのお三さんかたをお召し抱えなすつたのはどういう訣わけでございますか？」

「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍団子をやつても召し抱えたのだ。——どうだ？　これでもまだわからないといえ、貴様たちも皆殺してしまおうぞ。」

鬼の酋長は驚いたように、三尺ほど後へ飛び下ると、いよいよまた丁寧にお時儀をした。

五

日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹と、人質に取った鬼の子供に宝物の車を引かせながら、得々と故郷へ凱旋した。——これだけはもう日本中の子供のとうに知っている話である。しかし桃太郎は必ずしも幸福に一生を送った訣ではない。鬼の子供は一人前になると番人の雉を噛み殺した上、たちまち鬼が島へ逐電した。

のみならず鬼が島に生き残った鬼は時々海を渡つて来ては、桃太郎の屋形やかたへ火をつけたり、桃太郎の寝首ねくびをかこうとした。何でも猿の殺されたのは人違いだつたらしいという噂うわさである。桃太郎はこういう重ねかさ重ねがさの不幸に嘆息たんそくを洩もらさずにはいられなかつた。

「どうも鬼というものの執念しゅうねんの深いのには困つたものだ。」
「やつと命を助けて頂いた御主人だいおんの大恩おんさえ忘れるとは怪けしからぬ奴等やつらでございます。」

犬も桃太郎の渋面じゅうめんを見ると、口惜くやしそうにいつも唸うなつたものである。

その間も寂しい鬼が島の磯いそには、美しい熱帯の月明つきあかりを浴びた鬼の若者が五六人、鬼が島の独立を計画するため、椰子やしの実に爆弾を仕こんでいた。優やさしい鬼の娘たちに恋をすることさえ

忘れたのか、黙々と、しかし嬉しそうに茶碗ほどの目の玉を赫かせながら。……

六

人間の知らない山の奥に雲霧を破った桃の木は今日もなお昔のように、累々と無数の実をつけている。勿論桃太郎を孕んでいた実だけはとうに谷川を流れ去ってしまった。しかし未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている。あの大きい八咫鴉は今度はいつこの木の梢へもう一度姿を露わすであろう？ ああ、未来の天才はまだそれらの実の中に何人とも知らず眠っている。……

(大正十三年六月)

後註

- 一 ルビの「いつすんぼうし」は底本では「いつすんぼうし」
- 二 ルビの「につぼんいち」は底本では「につぼんいち」

桃太郎

底本：「芥川龍之介全集 5」ちくま文庫、筑摩書房
1987（昭和 62）年 2 月 24 日第 1 刷発行
1995（平成 7）年 4 月 10 日第 6 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999 年 1 月 8 日公開

2004 年 3 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。